

平成26年3月議会

第2委員会報告資料

- | | |
|------------------------|-------|
| 1 少年科学文化会館の移転再整備について | ・・・1頁 |
| (別紙) 「科学館との一体整備に関する概要」 | ・・・4頁 |

※別冊資料あり

こども未来局

少年科学文化会館の移転再整備について

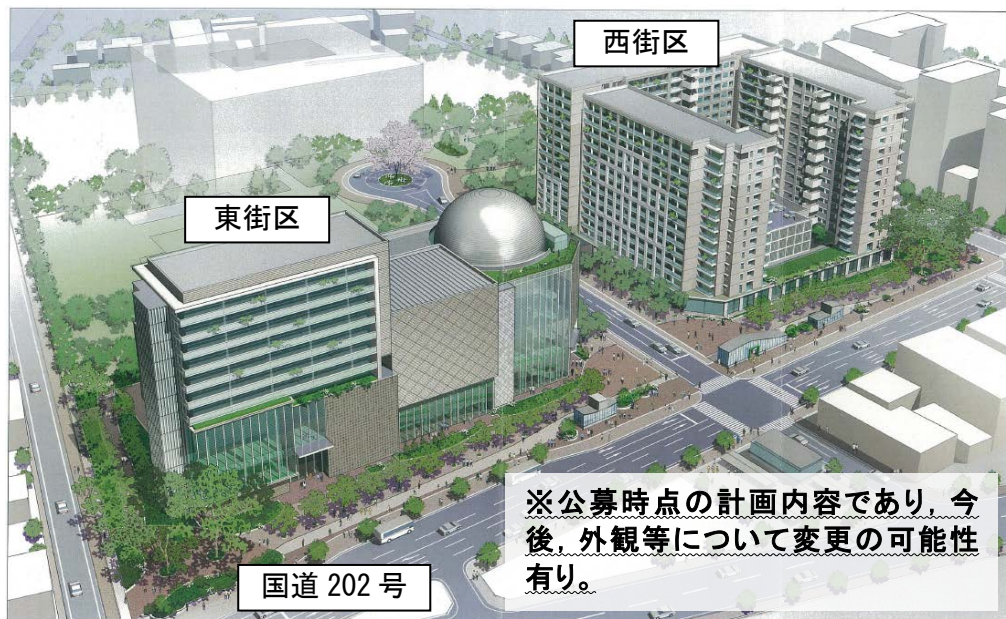
1. 九州大学六本松キャンパス跡地土地譲受人の募集概要及び結果

- (1) 事業名称 青陵の街・六本松地区〔福岡県福岡市〕土地譲受人募集
- (2) 地番及び面積 福岡市中央区六本松四丁目 300 番 1 の一部
 - 西街区 11,200.89 m²
 - 東街区 9,946.03 m²
 - 計 21,146.92 m²
- (3) 開札日 平成 26 年 2 月 17 日
- (4) 応札者数 5 者
- (5) 落札者 九州旅客鉄道株式会社（以下「JR九州」という。）
落札金額 117 億円

※平成 26 年 3 月 3 日にUR都市機構とJR九州で土地譲渡契約を締結

※併せて、福岡市を含めた 3 者で「(仮称)福岡市青少年科学館の整備等に係る協定書」を締結

2. 公募時点の東街区複合施設の計画概要



- (1) 導入機能 科学館，法科大学院，商業，有料老人ホーム，駐車・駐輪場 等を予定
- (2) 延床面積：約 37,000 m²
- (3) 計画容積率：約 300%
- (4) 駐車場・駐輪場等
 - 駐車場 200 台程度
 - 駐輪場 400 台程度

3. 科学館に係る公募時点のJR九州からの提案の概要

別紙「科学館との一体整備に関する概要」のとおり

4. JR九州からの提案のメリット

(1) 子どもにとってよりよい科学館の視点、ユニバーサルデザインの視点

子どもの育ち・学びの場として、子どもの視点を重視した子どものための科学館を構築することや、年齢や性別、障がいの有無を問わず、多様な市民に思いやりのある配慮を行うというユニバーサルデザインの視点を踏まえ、単独整備の場合と比べても、科学館の1フロアの面積がより広く確保でき、また、8階建ての想定が4層となることから、来場者が利用しやすく、自由度が高い諸室配置などが可能となる。

(具体例)

- ・基本展示をワンフロアに集約することで、展示替え時を含め、テーマ毎のスペースの割り当てや展示レイアウトの自由度が向上するとともに、異なる展示テーマの展示装置を連続して配置し、展示に連続性・ストーリー性を持たせることが可能
- ・オリエンテーション室や実験室などの学習エリアをワンフロアに集約し、学校団体にとっても利用しやすい諸室配置が可能
- ・プラネタリウムと科学に関する講演会等を行うスペースを同一フロアに整備することで、両室の特徴を生かした連携イベントの実施も可能

(2) 科学館と民間施設の相乗効果の視点

1～2階には、地域の賑わい創出や生活利便性の向上につながる施設のゾーンを計画しており、賑わいと学びの機能を備えた民間施設と科学館との回遊性が高まることで、集客効果とともに、連携イベントの開催などにより世代間交流による地域活性化が期待できる。

- (3) 外観はプラネタリウムの形状を生かしたデザインが施され、子どものワクワク感を高めるとともに、新たな街のシンボルとなり、拠点性の向上が期待できる。
- (4) バス乗降場・待機スペースは1階ピロティ内で、雨に濡れることなく、一般車両との交錯のない安全な場所に配置してある。
- (5) メインエントランスの近くにエレベーターやエスカレーターを配置し、子どもが科学館へ直行できる動線計画である。
- (6) 地下鉄駅と接続する計画で、地下鉄を利用される来館者にとっての利便性が優れている。
- (7) 子どもたちが学びの時間を過ごすことができる施設が設置されることで、科学館や法科大学院と合わせ、施設全体の学びをつなぐ環境が向上する。

※なお、学びをつなぐ機能や街の賑わいを創出する機能について、JR九州グループの経営資源を活用した取り組みを検討することとされており、科学館との更なる相乗効果につながる可能性がある。

- (8) エレベーター，エスカレーターや駐車場，駐輪場など機能の一部を共用とすることで，整備や管理コストの縮減が可能である。

5. 今後の協議のポイント

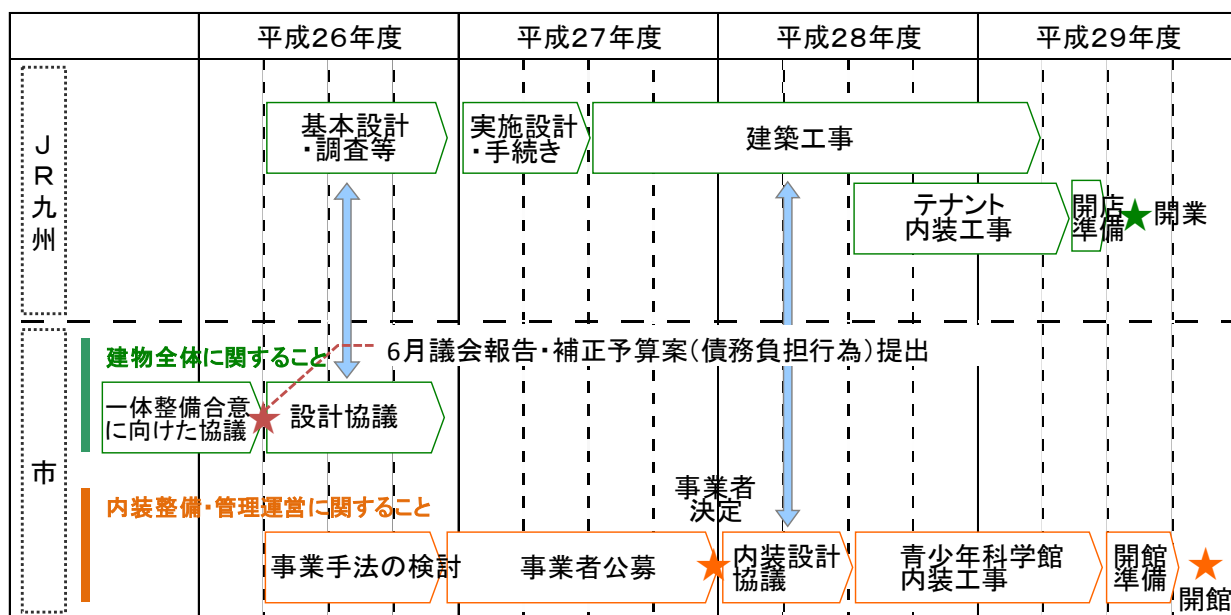
平成26年6月30日を期限として，福岡市とJR九州で一体整備に向けて，ユニバーサルデザインにも配慮した，来館者にとってより利用しやすい，魅力的な科学館となるように，また，地域社会，地域経済への貢献に資することにも配慮しながら，次のような点について，しっかりと協議していく。

- (1) 子どもが利用する施設として適切な動線計画や，科学館機能の実現に向けた複合施設の展開について
- (2) 駐車場や駐輪場の運営方法等について
- (3) 工事・管理区分，方法や，スケジュール等について
- (4) これらの協議を踏まえた，賃料その他の契約条件等について
- (5) 科学館との相乗効果が発揮できるような施設構成及び運営のあり方について

6. 想定スケジュール

施設の階数や規模，構造などから，JR九州の現在の計画では，平成29年度の中頃建物が完成予定であり，その後科学館は開館準備を経て，これまで市が想定していた平成29年度中の開館は実現可能な見込みである。

今後，JR九州と協議を進め，平成26年6月を目途に開館時期を決定する。



商業施設・法科大学院・有料老人ホームとの一体的整備で、人と人がつながり、回遊性・統一的景観等で拠点性の高い施設づくりをすすめます。

1 科学館整備の概要

所要室の天井高さや移動動線を考慮した各階の構成

科学館は、展示・研修・講演・学習など様々な機能が複合した施設で、天井高さも異なります。下図に示すように、吹き抜け空間を利用するなど、それぞれの機能に応じて空間設定を行い、エレベーターやエスカレーターの利用で機能動線にも支障ない計画とします。

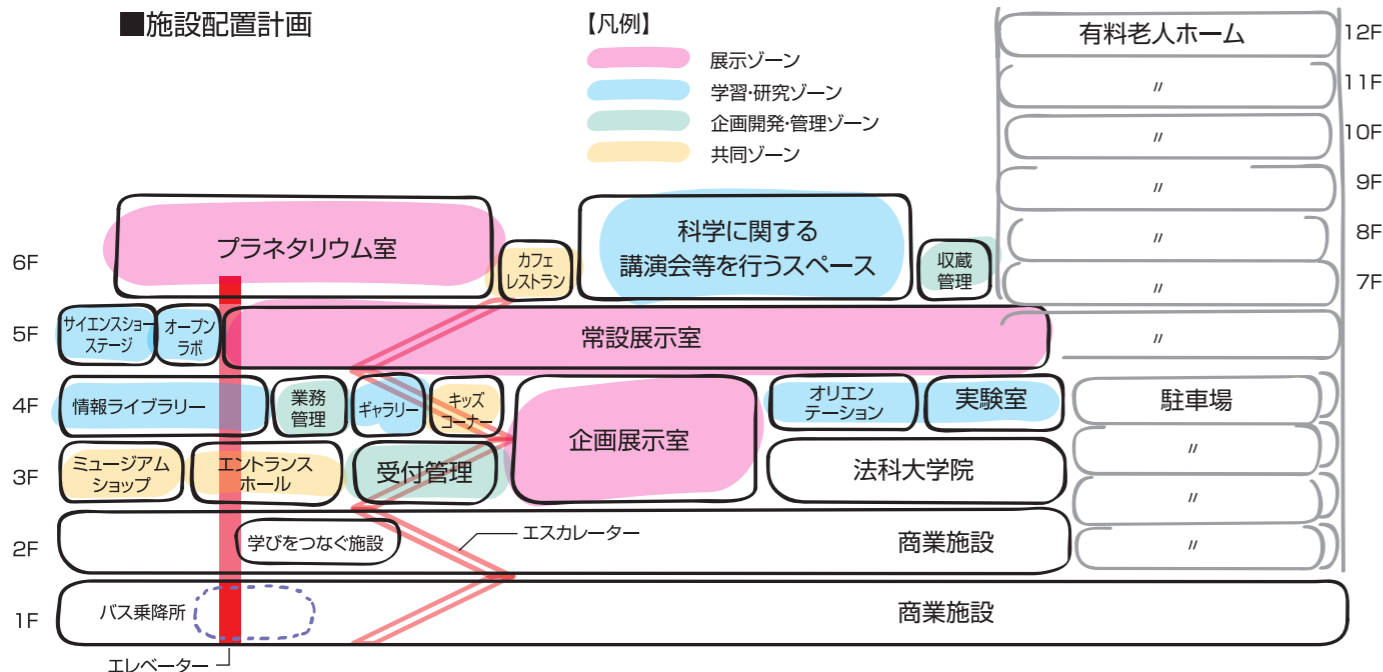
常設展示室はワンフロアとし、多様な企画に対応

科学館のメイン施設である常設展示室は、施設の中央にほぼ整形な形状でワンフロアにまとめて確保します。機材等搬入用のエレベーターによる単独動線を内に設け、企画展示と共に展示内容のタイムリーな入れ替えにも柔軟に対応できるように配慮します。

2 科学館と他の施設との一体的整備について

科学館は3階から6階の4層の建築で、複合施設と緩やかにつながる

科学館は、商業施設の上、3階から6階までに配置し、1フロア面積を広く確保すると共に複合施設内での回遊性が高まることにより集客効果が得られる計画とします。また、同じ街区の他用途の建物と一体的にデザインすることにより統一感のある景観を形成し六本松地区のランドマークとしての拠点性向上を図ります。



3 科学館利用者の動線計画

複数のアクセスルートで、利用状況に柔軟に対応

科学館利用者は、複合施設エントランスから、エスカレーターやエレベーターを利用し、3階の科学館エントランスに至ります。科学館内は主にエスカレーターや階段をメインの動線としていますが、ベビーカーを押す来館者や高齢者・障がい者はエレベーターによる移動も可能としています。科学館の団体利用者は、バス降車後、歩行者用通路3号を通るルートと、商業施設内を通るルートの二つのルートを使い分け複合施設エントランスに至り、エスカレーターやエレベーターを利用して、科学館エントランスに到達します。

シンボルのプラネタリウムの利用時間帯に配慮

単独で夜間の利用が想定されるプラネタリウムと講演会スペースはカフェレストランとともに最上階に設置し、エレベーターの着床コントロールで夜間は単独で利用できるようにします。

4 バス乗降場と複合施設のエントランスの配置について

利用者のアプローチしやすいエントランスの配置

バス乗降場は南側ピロティの中で、一般車両との交錯のない安全な場所に設置します。複合施設のエントランスは、公共交通施設からもアプローチしやすいエントランス広場Cに面した位置に設置し、バス乗降場からは歩いて安全にアクセスするルートを設定します。

5 建物デザインや色彩計画の考え方

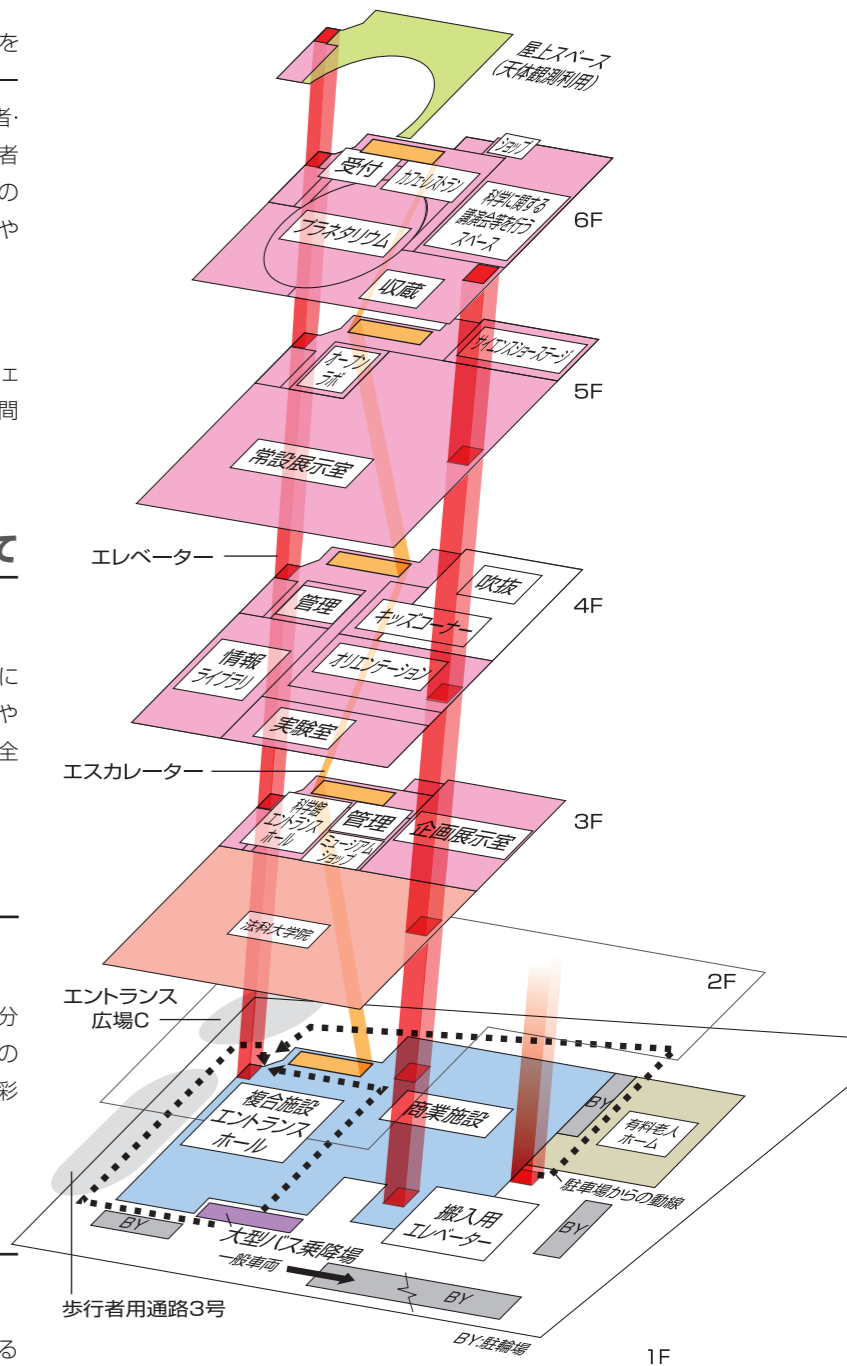
知的で、調和を重視した色彩・デザイン

複合施設の建物デザインは「学びをつなぐ」施設をイメージし、商業施設部分のカーテンウォールのガラスと科学館部分のタイル貼り、プラネタリウムの球体金属屋根部分とが知的にバランス良くつながる構成とします。色彩は、周辺にある緑化と調和する構成とします。

6 科学館来館者が利用する駐車場・駐輪場

複合施設と一体で利用

科学館来館者の駐車場は、車両動線をわかりやすくし安全性を保ちやすくするため、他の用途と兼用で一体的に利用することとします。自走式の駐車場から、エレベーター利用で地上階に到達できるようにします。駐輪場も一体利用で、複数のゾーンに設置し何処からも利用しやすい配置とします。



地域に寄り添い、新しい賑わいと潤いを提供する六本松シティ。…… 緑、学び、人、空間をつなぐ青陵のまち。

4つのまちづくり方針の実現 | 私たちは、本計画の主旨や、まちづくりの考え方に賛同し、まちづくりコンセプトに従って、以下のように計画をすすめます。

緑

をつなぐ

地域の方々に長く親しまれたキャンパスに残る歴史と物語に彩られた緑に加え、新たな緑を計画的に配置し、四季を感じる潤い豊かな環境を創ります。また、新たな緑の空間は、それぞれの通りや施設の機能に応じたメリハリのある植栽で、周辺環境に調和した「新しい繋がりのある緑化計画」とします。

学び

をつなぐ

旧制福岡高校から九州大学と引き継がれて来た学問の地を、「科学館」「法科大学院」「学びをつなぐ施設」など多様な学びの空間として引き継ぎ、幅広い世代にわたる学習空間を創出します。また、「学び」の連携が図れるよう施設を一体的に計画し、学びの場としての相乗効果を高めます。

人

をつなぐ

幼児から高齢者まで、多様な世代。訪れる人、暮らす人、学ぶ人、働く人。来街する様々な人々がつながり、交流する施設構成を提案します。特に、JR九州グループの幅広いネットワークを活かし、イベント等を通して地域とのつながりや賑わいの創出に取り組みます。

空間

をつなぐ

新たな司法機能と接続調和する施設配置や、地域との連携・相互発展(相乗効果)に配慮した施設配置で、エリア内外の空間をつなぐ計画とします。東側の施設では、「科学館」や「法科大学院」などの「学びの機能」を立体的に配置することにより、多様な空間のつながりで、施設利用の相乗効果が図れる施設構成とします。

1 緩やかにつながる賑わい・学び・安らぎの施設

学びの機能としての科学館や法科大学院、地域の賑わい創出や生活利便性を高める商業施設、高齢者が安心して生活できる有料老人ホーム及び駐車・駐輪施設が緩やかにつながる複合施設を計画します。各施設はユニバーサルデザインの思想に基づき幅広い世代が回遊的に交流し、賑わいと学びの機能の相乗効果が高まる構成とします。

2 施設の顔となる科学館

施設の中心となる科学館は、商業施設の上の3階から6階に配置し、1フロア面積を広く確保すると共に複合施設での回遊性が高まることにより集客効果が得られる計画とします。また、2階に配置された「学びをつなぐ施設」と空間的に緩やかにつながることにより学びの機能としての魅力が向上する計画としています。

3 法曹施設を望む法科大学院

法科大学院は、商業施設の上の3階のワンフロアに全ての機能を計画し、南側に配置した教室ゾーンでは、法曹施設を望みながら未来の法曹関係者が学問に励める環境とします。

4 「学びをつなぐ」施設と機能

子供達が放課後に学びの時間を過ごす事ができる学童支援施設、学習関連施設等の誘致により、子供達に新しい学びの場を提供し、科学館や法科大学院などの学びの機能へとつながる環境を創ります。加えて、JR九州グループの経営資源を活用した取り組みを検討します。

5 賑わいを創出する商業施設

国道202号線と地区内道路に沿って、周辺住民等が日常的に利用できる買物やサービスを提供できる機能を持ち、地域の生活利便性を高める商業施設を計画します。西街区の商業施設と共に、新たな地域の賑わいの創出に寄与します。

6 安心・快適・多世代交流の有料老人ホーム

有料老人ホームは、東街区の北東側に配置し、良好な住環境と充実した介護サービスを提供する計画とします。また、科学館に隣接しており、科学館利用の子供たちとの交流も視野に入れた計画としています。

7 安全・利便の要となる駐車・駐輪場・連絡通路

駐車場は、各施設で共用することにより、車の出入を統一し効率的で使いやすい計画とします。駐車場入口は地区内道路からとし、科学館利用のバス動線と一般利用の駐車場動線が交錯しない構成とします。駐輪場は分散的に設置し利便性に配慮します。また、地下鉄との連絡通路は商業施設と科学館のメイン動線となる階段エレベーターと地階でつながる構成としています。